

津山高専一大連東軟情報学院の国際交流活動 —2014 年度の活動—

藪木 登* 杉山 明** 趙 菲菲***

International exchange activities between Tsuyama College and Dalian Neusoft Institute - Exchange activities in fiscal 2014-

Noboru YABUKI, Akira SUGIYAMA and Feifei Zhao

In the last few years, the international exchange activities in our school are extremely rich and colorful. One of the activities is between Tsuyama College and Dalian Neusoft Institute since 2008 and began the formal exchange activities in 2009. This paper focus on the 2014 exchange activities. Before that, most of the activities were mainly about academic conference about research of each other. In 2014, we tried two new ways of communicating. First of all, we invited the professor of Dalian Neusoft Institute give the English lecture to our students, and our students also tried new type English teaching methods. Secondly, the situation that four Chinese students came to our school to study for a period of two weeks is different from the past. In the meantime, it is very meaningful that the Chinese students carried out the depth of communication with our students. And we also brought six our students to visit the Dalian Neusoft Institute. In this paper, we will make a detailed explanation.

Key words: Intensive course, English lecture, Dalian training trip, International exchange, Short-term exchange

1. 緒 言

近年、国立高等専門学校機構及び本校において、国際交流が盛んにおこなわれている¹⁾⁻³⁾。本校の交流の1つに中華人民共和国大連東軟情報学院との交流活動がある^{4),5)}。この交流活動において2014年度の活動について本稿で報告する。

中国大連東軟情報学院との交流協定が結ばれたのは2008年であった。そして交流協定に基づき、実際の交流活動が始まったのが2009年。当初は両校の学生が、英語または相手言語で研究発表を行うというものだった。実際にはこれに中国地区国際交流コンソーシアムの研究発表会を兼ねる年もあり、結局津山で2回、大連で2回の研究発表会を実施した^{4),5)}。

交流協定には四年間が経過した段階で見直すことになっていたため、この段階で交流内容を再検討することとなった。その結果、研究発表会に限定せ

ず広範囲に、そしていろんな形で交流活動を進めていくこととなった。現在行われている両校の学生の相互訪問、大連東軟情報学院の教員との共同研究は、この協定に基づくものである。

この交流活動において、2014年度は、2つの新しい活動と2013年度から実施している活動の3つの大きな交流活動が行われたので、この内容について報告する。その交流活動とは、本校の専門科目の一部分を、大連東軟情報学院の教員により、集中講義の形で英語の講義で実施した。また、大連への研修旅行の実施、初めての本校への短期留学が実現した。これらについて、以下で報告していく。

2. 大連東軟情報学院教員によるデータベース集中講義の実施

独立行政法人国立高等専門学校機構、留学生交流促進センター主催の英語による専門授業の実施を計画している。その内容は、高専での英語教育を補完するため、外国人講師による英語での専門科目の授業計画を支援し、今後、他の高専のモデルとなるような授業実践を促進することを目的としている。本校でもこの趣旨に対応すべく準備を行っていたが、この募集に対しては、採用はされ

原稿受付 平成27年8月31日

*情報工学科

**一般科目

***電子制御工学科

なかった。そのため、本校独自で以下の内容で実施した。

<実施内容>

科目名：データベース (Database System)
 対象学年：情報工学科 5年
 実施日：2014年7月22日(月)、23日(火)
 実施時間数：9時間
 講師名：彭志豪 (PENG ZHIHAO)
 講師所属：大連東軟信息学院
 コンピュータサイエンステクノロジー学部
 ソフトウェアエンジニアリング学科

<講義内容>

COURSE DESCRIPTION:

This course introduces database design and creation using a DBMS product. Emphasis is placed on relational theory, data integrity, data modeling, and creation of simple tables, queries, reports, and forms. Students will design small databases on one platforms—Microsoft SQL server.

COURSE OBJECTIVES:

Upon completion of this course, the student should be able to:

- understand user's database requirements and translates those requirements into a valid database design
- understand relational theory and conceptual design
- design and implement database structures
- create simple database tables, queries, forms, and reports

Software requirements:

Microsoft SQL server(query analyzer is required).

Note: SQL express is free to download and use.

本講義の最後は演習を行い、講師によりその演習結果を評価して、終了した(図1, 2)。

その後、夏季休暇終了後において、講義への参加学生にアンケートを実施し、そのアンケートの内容と集計結果を図3, 4にそれぞれ示す。図4において、質問番号は図4の下に質問項目を記載しており、縦軸は5つの評価の割合を全体を100%として示している。まず、「3. 演習問題を解こうと努力しましたか。」「6. 英語は聞き取りやすかったですか。」の2項目については、同意の意見が特に多く、「2. 講義の内容は理解できましたか。」「7. この集中講義を必ず実施するとしたら、設定時間は適切でしたか。」「9. 講師と積極的に会話できましたか。」の3項目については、同意の意見は比較的少なかった。これについては、感想の中にも含まれており、今後講義のやり方について考慮する必要がある。



図1 講義における演習の様子



図2 講義における講師と学生交流の様子

2014年度 Database system 集中講義「アンケート」						
情報工学科5年「データベース システム」の英語による講義を7月22日(火)、23日(水)で実施しました。 次の質問に対して、あなたの思いに該当する数字に○をしてください。						
質問項目	評価区分	とても 思う	そう 思う	どちらとも いえない	そう思 わない	まっ たく思 わない
1. 意欲的に参加できましたか。		5	4	3	2	1
2. 講義の内容は理解できましたか。		5	4	3	2	1
3. 演習問題を解こうと努力しましたか。		5	4	3	2	1
4. 内容のレベルは適切でしたか		5	4	3	2	1
5. 説明は、わかりやすかったですか。		5	4	3	2	1
6. 英語は聞き取りやすかったですか。		5	4	3	2	1
7. この集中講義を必ず実施するとしたら、設定時間は適切でしたか。		5	4	3	2	1
8. 英語での講義は必要と思いますか。		5	4	3	2	1
9. 講師と積極的に会話できましたか。		5	4	3	2	1
10. 受講して良かったですか。		5	4	3	2	1
ご協力ありがとうございました。						
最後に、この講義に対する感想や意見を下欄に書いて下さい。						

図3 アンケート内容

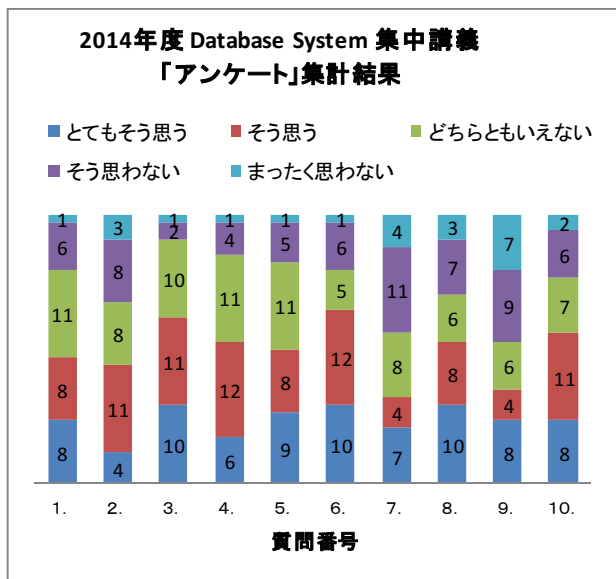


図4 アンケート結果

<図4の質問項目>

1. 意欲的に参加できましたか。
2. 講義の内容は理解できましたか。
3. 演習問題を解こうと努力しましたか。
4. 内容のレベルは適切でしたか
5. 説明は、わかりやすかったですか。
6. 英語は聞き取りやすかったですか。
7. この集中講義を必ず実施するとしたら、設定時間は適切でしたか。”
8. 英語での講義は必要と思いますか。
9. 講師と積極的に会話できましたか。
10. 受講して良かったですか。

<感想>

- ・来年もやった方がよい
- ・長すぎて集中が切れる、短時間で分割してほしい(4)
- ・思いのほか発音がよく聞き取りやすかった
- ・英語力の低さが目に見えてわかった
- ・説明だけでなく、実技も混ぜればより理解が深まると思う
- ・通常の授業との関わりがもっとわかりやすいとよい
- ・よくわからなかった
- ・英語のため内容があまり理解出来なかったが、楽しく講義を受けることができた
- ・わかりやすく熱心に説明していただきよかったが、学生側の意欲が欠けていた人が多かったのが残念。もっと学生側の意識を改善すべき
- ・最初は時間も長く英語のみだったので、とても抵抗があった。しかし、先生が優しく英語も聞き取りやすかったので、データベースの講義としてではなく、英語を使ったコミュニケーションのとれる講義を受けた。
- ・改めて英語の大切さを学んだ

3. 大連研修旅行

この章では、2013年から始まった、本校学生の大連東軟情報学院訪問について報告する。

3. 1. 実施形態

現在の形を取るようになってから、2013年、2014年と二回の大連東軟情報学院訪問を実施した。それぞれの参加学生数は、2013年4名、2014年6名である。かつて本校で実施されていた上海研修が毎年10名程度の参加者を得ていたのに比べ減少しているが、この原因として、

- ①本校の海外研修プログラムの多様化による学生の選択肢の増加
- ②日中関係の悪化による精神的な抵抗感の発生の2点を挙げておきたい。

研修内容については、表1に2014年の日程表を示す。

表1 大連研修の日程表

(平成26年10月9日(木)～12日(日)*1)

	10/9(木)	10日(金)	11日(土)	12日(日)
午前	8:00岡山空港1Fロビー集合 10:00離陸(KE748) 11:45仁川着乗換	7:15食堂にて朝食 8:30ロビー集合 ・企業見学(アルパイン)*3 ・英語授業見学	7:30食堂にて各自朝食 9:00ロビー集合 班別市内オリエンテーリング発*5 ・バスの乗り方 ・買い物の仕方 ・食事の仕方	食堂にて各自朝食 各自チェックアウト 荷物を預け各自自主活動*7
午後	13:00仁川発(KE869) 13:20(現地時間)大連着 入国手続等	13:30日本語授業参加 15:00移動市内のホテルへ*4 16:00チェックイン手続き 両替の実践	15:00ホテルロビーに集合 成果報告会	各自昼食後出国手続等 14:30離陸(KE870) 16:50(日本時間)仁川空港着 18:40仁川発(KE870)搭乗手続等
夜	18:30大学にて夕食 学内見学 20:00頃帰宿	18:00夕食 注文、支払い実践 20:00頃帰宿	各自夕食*6 21:00点呼	20:10岡山着 入国手続等 解散

以下*1～*7には、各項目に対するコメントを示しておく。

*1 2013年は11月に実施した。しかし大連では11月はすでに氷雨の降るような天候であるので、2014年には10月実施とした。

*2 3泊のうち1泊は大連東軟情報学院の留学生宿舎に泊めていただく。現地での学生宿舎や学生食堂を体験するのも研修の一環と考えるからである。現地学生との交流の機会が増えるという事実もある。

*3 アルパインは大連東軟情報学院と同じ敷地内にある日系の自動車部品メーカー。日本人駐在員2、3名の他はすべて中国人従業員。この年は高専出身の所長との質疑応答も有り、中身の濃い研修とな

った。

*4 市内の一般ホテルに宿泊するのは、ホテル関係の会話の実体験、第3日の市内オリエンテーリングの実施を容易にすることはもちろんだが、同時に大連市内の歴史的な町並みを実感することにもある。参加者には、事前学習として大連の歴史学習を課してあるので、ホテル周辺の大連賓館、大連駅等も学習教材となっているであろう。

*5 市内オリエンテーリングは、参加学生を2~3人で1班とし、与えられた課題をこなしていくというものである。見知らぬ外国の地で、創意と工夫で問題を解決していく能力を養うことを目的とする。以下に与えられる課題の例を挙げる。

- ・市内の茶葉店へ行って、指定された種類のお茶を指定量だけ買ってくる。
 - ・市内の理髪店へ行ってひげを剃ってもらう。
 - ・東方航空のオフィスへ行って、マイレージカードを作る。
 - ・どこかで絵はがきを買い、郵便局へ行って、日本の家族宛に投函。
 - ・昼食は指定された物を探して食べる。等々
- 各班には、ヘルプとして、中国人学生1名がつく。但し、これはあくまでヘルプであって、日本人学生が課題達成に窮した場合に解決方法を示唆する、あるいは危険に遭遇しそうな場合にそれを回避するための存在である。この点を徹底しておかないと中国人学生が次々と課題を解決、日本人学生はその後をついて行くだけになってしまうので、事前に強く指示しておく。

*6 第3日の夕食は引率教員が関知せず、学生諸君のみで市内のレストランを利用して夕食をとる。昼間の市内オリエンテーリングで同行してくれた中国人学生を囲んで、となることも少なくないようだ。

*7 最終日の午前中は完全に自由活動である。学生諸君の進歩は早く、買い物、観光等、すべて引率教員の手助けを求めることなく、自分で目的を果たしてくる。

3. 2. 研修の成果

出発まではすべての学生が疑心暗鬼に陥り、中には指導教員や保護者に言われていやいや参加する者もいるのだが、帰国後はほとんどの学生が「楽しかった」、「また行きたい」と言う。これだけでもすでに大きな成果と言えると思うのだが、以下に研修を通じて参加学生が得たと思われるものを何点か挙げておきたい。

①国際性 当たり前の話しだが、国際性が涵養される。日本の常識が外国では通用しないことを知る。但し、だから面白いと考えるか、だからた

いへんだと考えるかは、個人による。

②積極性 中国人学生は授業に於いても私生活に於いても積極的である。彼らのそんな様子を見て、自らの積極性を覚醒される。次は、参加学生の事後レポートの一節である。

「僕たちの授業風景と決定的に違ったことは、学生の発言量がとても多いということです。・・・学生が気になったことはすぐに質問し、教師との間で議論が行われているようでした。日本の学生は授業中にあまり質問をしないし・・・」

③精神的なたくましさ 海外旅行にトラブルはつきものだ。飛行機の遅れ、意思の疎通の難しさによる誤解、タクシー料金の不明瞭さ・・・。しかし大切なことは、トラブルに遇わないことではなく、トラブルを克服する力を身につけることであり、あるいはトラブルを受け入れ、楽しむことであるはずだ。参加学生諸君はこの研修を通じて、少しではあるがそういったたくましが身につくように思う。

④中国への偏見の払拭 日中関係は複雑で難しい問題も少なくない。しかし、トラブルの原因のほとんどは双方の誤解と偏見である。そしてその誤解と偏見は無責任なマスコミと根拠の無い世論によって生み出される。研修参加学生もそういった誤解と偏見に汚染されているのは同様である。しかし彼らは自らの目で本当の中国社会や、そこに生活する中国人を見て考えを新たにす。次は、中国人は時間にルーズで日本人ほど熱心に仕事をしないという先入観を持っていた学生の事後レポートの一節である。

「社員の皆さんの仕事をする姿勢を見ても、(日本人の)社長さんがおっしゃっていた、中国人は日本人に比べ勤勉であるという意見にも納得がきました。」

⑤中国の友人 若者は親しくなるのが早い。研修参加者の中には、帰国後も中国側学生とメールのやりとりを続ける者も少なくないようだ。

図5に参加した学生が撮影した大連の風景画像を示す。

最後に今回の訪問企業、宿泊先、参加費をまとめておく。

- ・訪問企業 アルパイン
- ・宿泊施設 1泊目 大連東軟信息学院留学生寮
2、3泊目 中山大酒店
- ・参加費 往復航空券+燃油チャージ+空港税+宿泊費3泊分+大連空港~大学、ホテル間交通費+朝食3回+昼食1回+夕食2回+旅行保険にて9万円/一人分析方法



図 5 大連の風景

4. 大連学生の本校での短期留学

大連東軟信息学院の学生 4 名が本校へ 15 日間来校することとなった。研究発表による短い期間での来校は今までに 2 回実施された。しかしながら、15 日という期間での来校と本校で講義を受ける短期留学として実施するもので、初めての実施である。このため、本校、国際交流委員会大学等との交流促進ワーキンググループのメンバーである大連東軟信息学院との交流担当である 3 名の教員が中心に来校時の宿泊場所、食事、受講科目、イベントのスケジュール等について相談を行った。もちろん大連東軟信息学院国際教育学院の担当者とも連絡を取り合い進めていった。来校する学生は 3 名は日本語能力試験⁶⁾による日本語レベルは「N2」であり、目安として「日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる。」と示されている。以下に実施事項を記載する ((1)~(8))。

- (1) 来校期間 平成 27 年 1 月 12 日 (月) ~ 26 日 (月)
12 日 (月) 岡山空港着
26 日 (月) 岡山空港発
岡山空港 - 津山高専間の送迎は大連東軟信息学院との交流担当である 3 名の教員と事務より 1 名が担当した。
- (2) 来校人員 男子学生 3 名 女子学生 1 名 合計 4 名
- (3) ホームルームは情報工学科 4 年 (C4) または 5 年 (C5) とし、チューターは C4 へ 4 年男性 2 名 (内 1 名は中国からの留学生であり、寮生)、

- C5 へ 5 年男性 1 名 女性 2 名 (内 1 名は寮生)
なお、この内留学生以外は 2014 年度の大連研修参加者である。
- (4) 宿泊場所 男性 3 名は合宿研修室、女性 1 名は本校の学生寮とした
- (5) 食事 基本的には寮の食堂で他の学生と同様の食事を行う。
- (6) 必要経費 寮の食費 13 日 + 光熱費等 (前払い)
- (7) 授業以外の主な活動
(ア) 校長との面会 13 日 (火) 朝 (校長室)
(イ) 課外活動見学 13 日 (火) 放課後は、吹奏楽部見学 (歓迎ミニコンサート)、その他の部活動見学
(ウ) 津山市長訪問 13 日 (火) 午前 (津山市役所)
(エ) 他校訪問 (津山商業)
(オ) 市内見学
- (8) 講義
杉山教員が担当する中国関係の講義への参加
 - 14 日 (水)、21 日 (水) 8 時限 チャレンジゼミナール (3 年)
 - 13 日 (火)、20 日 (火) 3, 4 時限 中国語 I (4 年)
 - 基本となる留学生の授業時間割を図 6 に示す。授業以外の行事と重なる場合による変更を行っている。

図 7、8 に校長との面会及び津山市長訪問時の集合写真をそれぞれ示す⁷⁾。また、津山市長訪問は、山陽新聞の記事でも紹介されている⁸⁾。

大連信息学院短期留学生時間割

	月	火	水	木	金
8:50	実践英語 I ランボー	自習時間 図書館	工業倫理 稲田 C 5	情報ネット ワーク 岡田 C 4	日本事情 杉山 図書館
9:40	専 1				英語 V 近藤 C 5
10:40	II				
10:50	日中比較 杉山	中国語 I 杉山	物理 I 前澤	応用数学 II 佐々井 C 4	世界史 角谷
11:40	III				多目的ホール (図書館 2 F)
11:45	IV		マルチパー バス (物理)		
12:35	昼 休 み				
13:20	応用物理 II 佐々井	英語 IV 近藤 C 4	選択英語 ランボー 典子 合併	国語 IV 江原 C 4	体育 内倉 C 4
14:10				情報ゼミナ ール C 4	
14:15	VI				
15:05					
15:10	VII	日本語 ランボー 典子			
16:00					
16:05	VIII	専 2	チャゼミ 杉山 E 3		
16:55					

図 6 授業時間割



図7 校長との面会（校長室）



図8 津山市長訪問（津山市役所）

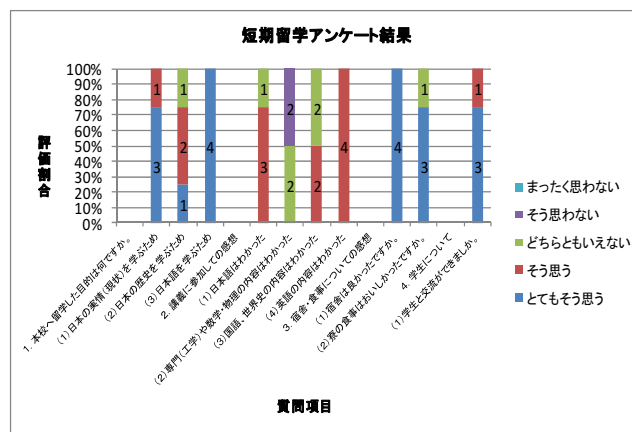


図10 短期留学アンケート結果

最終日に実施した留学生アンケートを図9に示す。その集計結果を図10に示し、アンケートの記述式部分への記載された回答を以下に示しておく。記載されていない項目は未記入部分である。

1. (4)日本での生活を実感したい
4. (2)皆はやさしいです。熱心、やさしい、礼儀正しい。とてもやさしい、楽しい。
4. (3)日本学校の環境が好き
5. (1)市役所、津山商業高等学校他
7. 感想と意見
 - ・日本はとてもきれいし、日本人はとてもやさしいだと思ふ。
 - ・津山の環境は美しくし、空気は新鮮し、食物はおいしかったです。将来は機会があれば、またここに旅行にしたいです。この2週間、津山高専の生徒たちと先生からいろいろお世話になりました。誠にありがとうございます。后会有り
 - ・とても良い。誠にありがとうございます。

アンケート結果及び文字数の関係で掲載していないが別途作成してもらった感想文と学生に直接聞いた意見をまとめると、日本についても本校についても、さらに、本校学生についても良い印象を持ったことがわかる。しかしながら、受講した講義においては、数学・物理・専門の理数系授業については、専門性があるため難しかったようである。次回、留学で来た学生へこの結果を反映したいと考えている。

5. ま と め

本稿では、2014年度に実施した中華人民共和国大連東軟軟信学院と本校との国際交流活動について報告した。この年は、例年と異なり、2つの新しい活動を実施した。まず、本校の講義科目の一部を交流

2014年度 短期留学(2015.1.12-1.26)「アンケート」						
(氏名)						
次の質問に対して、あなたの思いに該当する数字に○をしてください。						
・記述欄は、日本語でも中国語でもよいです。						
質問項目	評価区	とても思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったく思わない
1. 本校へ留学した目的は何ですか。						
(1)日本の実情(現状)を学ぶため		5	4	3	2	1
(2)日本の歴史を学ぶため		5	4	3	2	1
(3)日本語を学ぶため		5	4	3	2	1
(4)その他の理由があれば記述してください						
2. 講義に参加しての感想						
(1)日本語はわかった		5	4	3	2	1
(2)専門(工学)や数学・物理の内容はわかった		5	4	3	2	1
(3)英語、世界史の内容はわかった		5	4	3	2	1
(4)英語の内容はわかった		5	4	3	2	1
(5)講義に関しての感想があれば記述ください						
3. 宿舎・食事についての感想						
(1)宿舎は良かったですか。		5	4	3	2	1
(2)寮の食事はおいしかったですか。		5	4	3	2	1
(3)感想・意見があれば記述ください。(特に良かった点、悪かった点があれば)						
4. 学生について						
(1)学生と交流ができましたか。		5	4	3	2	1
(2)本校の学生に接しての感想を記述ください						
(3)その他感想があれば記述ください						
5. 校外見学						
(1)見学に行った場所を記述ください						
(2)良かった場所を記述ください						
(3)興味がなかった場所があれば記述ください						
(4)その他感想があれば記述ください						
6. 費用						
(1)在日中に、寮の食事以外で使った費用を教えてください		約		円		
(2)在日中で(1)以外で、使った費用を教えてください。(おみやげ代を含む)			約		円	
7. 全体的に滞在中の感想や意見を記述ください						

図9 短期留学アンケート

大学の教員に英語で集中講義として実施した。2 日間という短い時間であったが、日本語で習っている内容を英語で受けることによって、学生の英語経験を積むことができた。もう 1 つは、本校からは大連の大学へ短期留学したことがあるが、4 名の学生が来校し、短期留学が実施された。お互いの学生の交流ができ参加した学生には良い経験となった。また、2 年目となった大連への研修旅行においても、本校の学生と研修先の学生が同じ目的で一緒に行動することにより、異国の文化を少しでも知ることができ、学生同士の交流も十分でき、帰国後も連絡をとりあう学生もいた。

2015 年度は、短期留学で、大連へ本校から行くことも計画されている。もちろん今後も大連東軟信息学院との交流活動は継続していく予定である。

参 考 文 献

- 1) 国立高専機構留学生・国際交流, http://www.kosen-k.go.jp/joho_kokusai.html, 独立行政法人国立高等専門学校機構,
- 2) ISTS2014, <http://www.ists2014.ntut.edu.tw/bin/home.php>, 独立行政法人国立高等専門学校機構, (2015).
- 3) 5th International Symposium on Technology for Sustainability, <https://sites.google.com/site/ists2015/>, 独立行政法人国立高等専門学校機構, (2015).
- 4) 久保川晴美, 藪木登, 杉山明, 曾利仁: 津山高専—大連東軟信息学院学生研究発表会の実施, 平成 22 年度全国高専教育フォーラム・教育教員研究集会講演論文, (2015) 357-360.
- 5) 久保川晴美, 藪木登, 杉山明, 曾利仁: 津山高専—大連東軟信息学院交流活動における研究発表の学生への効果, 高専教育, 36(2013)679-684.
- 6) 日本語能力試験 JLPT: <https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html>, 国際交流基金と日本国際教育支援協会, (2015).
- 7) 最近の出来事: 1 月 12 日から 26 日に中国の大連東軟信息学院から学生 4 名が来校されました, <http://www.tsuyama-ct.ac.jp/dekigoto/dekigoto201501.htm>, 津山高専, (2015).
- 8) 山陽新聞, 2015 年 1 月 15 日朝刊, (2015)22.